

～皆様へ感謝～

Thanks to Everyone

学長 亀井 一郎

私が本学に奉職して7年余り、学長に就任してまもなく4年になる。この間、大学に対して何ができたろうか、教職員皆様に恩返しできたろうかと考える日々である。学長に就任した際、「一人一人の意識改革とコミュニケーション力の向上」を掲げた。それはとりもなおさず大学力アップのためであると考えたからである。このことは常々口にしてきたつもりであるが十分認識してもらえたろうか、大学力はアップしただろうか、否、不十分であろう、私の力量が学長という重職には任が重すぎたのであろうと反省する日々である。

初めて教授会に出席し本学就任の挨拶をさせていただいたとき、私の父が教職に長く就いていたこともあり、そのDNAが私を最後の仕事の道として、本学教職に向けたのであろうと申し上げた。もうひとつ、外科医としてメスを揮うことが最良の医療と位置付けていたことが大きな間違いであったこと、患者さんにとっての本当の医療はメスの後のリハビリテーションから始まるものであると認識したことを申し上げた。後者の考え方は今も全く変わっていない。前者については少々認識が不足していたことを知らされることになる。私の父は、私の口から言うのもおこがましいが、誠心誠意生徒のために尽くしていた。生徒からも保護者の方々からも大いに信頼されていたと思う。その分、私たち家族子供はあまりかまってもらえなかったことも事実である。よく言えば博愛主義、一般的には自身の子に対しては放任主義であったのかもしれない。また、当時の教員は時間的にも余裕があり生徒とのコミュニケーションも豊富で、何度か父の教え子（昭和30年代の小学生たち）が電車を乗り継いで我が家に遊びに来ていたことも記憶に残っている。遊びも大好きで、教師の身でありながら麻雀、パチンコ、競馬等にも熱心であったこともよく憶えている。そのような父と比べて、私は教員として十分学生や教職員のために尽くせただろうかと自問する。ましてや学長としては…である。

ある時、幹部職員から「学長のビジョンは何か」と問われたことがある。私は即座に「あそこをこうして、これをこのように改善して…学生が充実した大学生活を送れるように」と返答した。すると「それはビジョンではない、ビジョンとはもっと大きいものだ」と諭された。当初その意味がピンとこなかったが、後になって徐々に理解することになる。そう、私ののは戦術であり戦略ではなかったのである。学長としてはもっと大きな戦略を語るべきだったのである。このことが皆様を幸せにできなかった大きな要因であった。

大学のためにできたことを一つ挙げるとするなら、会議体の縮小（会議体の数や各々の会議体のメンバー数の見直し）であろうか。人間というものは、仲間が多いと“誰かが発言するであろう、誰かが聴いているであろう”と思いがちである。こうなると労力や時間の浪費が起こってくる。編成に関

する批判はあったかもしれないが、会議におけるメンバー個々の発言頻度の増加、discussion の充実、風通しのよさには若干貢献できたものと思っている。

さて、言うまでもないが大学の本分は教育、研究、地域貢献である。本学教職員方々においては教育、地域貢献に関してはかなりの部分を傾注してもらっている。他大学と比べても優位に立っていると考える。残るは研究であるが、これについては武田雅俊先生のご就任と「認知予備力研究センター」の設置により、研究の方向性が明確になってきており、今後の発展が大いに期待できる。先達の言葉に「本も読まねばならぬ。考えてもみなければならぬ。しかし凡人は働かねばならぬ。働くとは天然に親しむことである。天然を見つめることである。かくして天然が見えるようになる。」というのがある。“天然に親しむ”とは、仕事（研究）を真摯な態度で積み重ねること、“天然を見つめる”とは、虚心坦懐に成果（研究結果）をみつめ、天然が教えてくれたものを掴み取ることである。然して仕事の全般、研究の全体が見えてくるのである。是非このことを忘れないでいただきたい。

本学の状況は、特に入学志願者数において、現時点では決して明るいとは言えない。この時期に大学を去ることは誠に残念であり、ご指導、ご支援をいただいた皆様には本当に申し訳ないと思えるが、新体制のもと、自身への pride と他者への respect を忘れずに大いに発奮していただき、本学をより高いところへ導いていただきたい。私もこの後、リハビリテーション医学、医療から離れることはないので、本学の発展のためには外から微力を注ぎたいと考えている。

皆様、本当にありがとうございました。